

Chapter 3

1 進化論 evolution theory

人は勝利の最中さなかにあつて敢えて過去を振り返ることがある。

イユノはいままでの自分の惨めな人生を鑑みていた。何というムダな時間だったことか。もしあのまま五十歳にでもなろうものなら、初めてから生まれてこない方がよかった。などと罰当たりなことさえを考えている。すなわち余裕なのだ。

今日も領土を睥睨する王者のような気持ちで悠々と教室に入り、誰とも言葉を交わすこともなく、しかし満たされて楽しく、生き活きとした表情で双眸を炎のように輝かし、席に着いた。

生徒らがそろい、やがて授業が始める。彼女はまるで映画を見るもののように無関心に、それでいて愛でて鑑賞するように眺めている。

「平和だわ。何一つ欠けることのない、均整の取れた正円のようなわ」

イユノは太陽のコロナのような美しい輝かしい明るい炎が球体となって自分の身の周りを囲むように感じた。

「幸福だわ」

6時限目の数学の授業が終わって終業チャイムが鳴りその後に担任が入って来て彼から連絡事項を聞きみんなで教室を出て階段を降り部活の連中とは別れて昇降口で靴を履き換えてから校庭を廻る敷地内の路を行き正門を出てバス停で待つてバスが来たら乗って駅前で降り改札抜けて16時7分発なので余裕で既に停車しているその電車に乗ったらあたかもそこでずっと待っていたかのようにシノブがいた。

腕を組んで立っている。しかし彼女がイユノの乗る車両をあらかじめ知ることにはできないはず（イユノは乗る車両をいつも変えてい

た。毎日同じだと死にそんな気分になるからだ」だった。

「最近、ずいぶんモテるようになったじゃない」

嘲るかのような笑みを浮かべ、睥睨するかのような眼差し。そんなシノブの言葉にイユノは興味もなく、

「ふーん。」

また何かつまんないこと言おうとしてる？」

「ふん。」

近頃、男の子の注目集めまくっているからさ。ずいぶん変わったものねー。昨日だって、この駅前でチャライ奴に声かけられてるの見たよ。はは」

蔑みの哄笑をする。イユノは薄眼にして興味ないと言わんばかりのダルい顔に擬^ぎし、

「そうなの？ 知らねーし。」

て言うか、あんた、ずっとわたしを見てたんだ？

まじでストーカー？」

「は。くだらねージョーク言ってるじゃねーよ。」

それにしてもなるほど、不良連中相手になかなか凄い **FORCE** を見せていたじゃない。

ムダなエネルギーね。大袈裟だわ、あんなの。品がない、力に物を言わせて」

「見てたんだ。」

まじストーカーじゃん(笑)」

「結局、この日が来ちゃったのね。あんたの家柄ならどんな神霊降臨があったか見当がつくけど、凄いのが降りて来たみたいね。」

最悪の予想が当たっちゃったわ」

「降りた？ 予想？ 最悪って、はあ？」

そう言いながらもシノブの家、葦原家がどんな神を祀っていたか思い出そうとしていた。

「そうね。」

降りたっていうんじゃわからないかしら？ それなら、予定調和

とか、お望みのとおりに熟しましたとか、宿命のままにとか、預言（予言じゃなくてね）のままにとか、ある意味、運命によって魔神を召喚したようになって感じの……」

イユノは眉をしかめる。

「降臨？ 召喚？ 神が降りて来たってこと？ それとも魔方陣で呼び出すみたいなの？ ぜんぜん違うねー。わたしはさ、本当の自分に還っただけよ」

駅のアナウンスが流れた。「間もなく大雨おおあめ行きの電車が出発いたします。お乗りのお客様はお近くのドアからご乗車ください」

「あんたこそ意味がわかんないわ、イユノ」

シノブの面から笑いが失せる。

発車を知らせる音楽が流れる。「まもなく発車いたします。閉まるドアにご注意ください」 ドアが閉まった。

「話してもムダ、って言うか、事情が違うみたいね。別に興味ないけど」

ゆっくり電車が動く。

「わかんないの？」

わたしたちは進化した人間なのよ」

イユノはドアに背中をつけて寄り掛かり、腕を組んだ。

「へー。」

で、それが何か？ て言うか、あんた、何者なの？ 予想していたって何？」

シノブはウエストの左右に手を添えて、

「順番に話してやるよ。」

いいか、すべての生物は進化してきたわ。そして、人間が最も高度に発達している」

「犬の嗅覚にはかなわないけどね。ああ、それと自力じゃ飛べないし、海の中で呼吸することもできないし、厳寒地で冬眠もできないけどね」

「トータルで考えれば人間が最も優れているし、構造も複雑だわ。」

議論の余地なく。

何で人間は成人になるまで時間がかかると思うの？　ほかの生物に比べて高度で複雑だから成長するまで時間がかかるのよ」

「不便だけじゃん」

「人間が他の動物と一番違うところはどこだと思う？」

「直立歩行？」

「他人のために自分を犠牲にできることよ」

「まさか、あんたの口からその言葉が出るとはねー。盲導犬や救助犬は他人のために働いてるわよ」

「そうするように教え込まれているからよ。ボスに従う性質を利用されているだけに過ぎないわ。」

どっちにしろ、仲間のために尽くしているのだから。家族や仲間のために闘うことは動物でもできるのよ。

無関係な他人のために戦えるのは人間しかない。無関係な他人のために自分の損得を超越できるのは人間しかない」

「そうだっけ？」

じゃー、人間のかたちはしているけど人間じゃない奴、いっぱいいるね。

つーか、人間モドキの方が多いいんじゃない？」

「そうよ。」

そういう連中は進化に乗り遅れた連中、淘汰されるべき劣等な人種よ」

「ふふ。」

あんたの理論によって考えるんなら、あんたがいま言ったようなこと言えちゃう奴が最も劣等ってことになるよーな気がすんだけど？」

シノブは動ずることもなく誇らしげに胸を反らす。

「わたしには高邁な精神がある。」

神に相応しい非地上的な、天上的な精神があるわ。だから人間的な価値を超越しているのよ。すべてを犠牲にして、正義の世界を創

ろうとする高潔な意志があるわ。

だから過酷なことを言う資格があるのよ。わたしは神、選ばれた者なのよ」

「ふーん……」

少し共通点が見えてきた……かな？」

「神こそが究極、進化の行き着くべき最終のかたちなのよ」

「何だか有難味のない神ね。」

で、あんたはどうやってその神になったわけ？」

「あんたは？」

イユノは車窓の風景を見た。つまんない景色だ。民家や雑居ビルや……小さな街だ。

「生まれつき神だったわ」

「わたしもそうよ。」

神の設計図が継承されていたからこそ突然変異が起こって神の依り代に相応しい人間になったのよ。

だから神が降臨した」

「はー、また意味わかんない。

自分が神なの？ それとも神の乗り物なの？ だいたい、設計図って何よ？」

「だから依り代だって言ってるじゃん。

乗り物よ。

設計図ってのは遺伝子よ。遺伝子は生命の設計図。乗り物の設計図。生命の未来図。

生命が種族として継続するために個体を設計する。突然変異が起こるとその設計図が書き換えられる。書き換えられた設計図を今度は後生大事に次世代へ継承する。それが生命の営みよ。

生物の進化が突然変異によって起こるのは知ってるわよね？」

「ダーウインの進化論か」

「不思議に思わない？」

生命全体はまるで意志があるかのように一つの方向にしか向かわ

ない。

生命の意志は後退しない。

生命という存在の仕方は逆へ向かうことがない」

「そう？ 退化したり、滅んだりした種類の動物もいるんじゃないかな？」

「部分的な話よ。全体としてはそれも進化のステップの一つだったわ」

「ふーん。ま、いいや」

「進化は生存の闘いに生き残るためのスキルアップだけど、もの凄くたくさんのスキルがある。

何でこんなのがあろうかってぐらいね」

「確かに、たくさんあるには違いないね。別にこうじゃなくてもいいじゃんってのもあるし。

スカンクの屁とか(笑)」

「昆虫の擬態も不思議だわ。食虫植物がなぜ虫を食べるのか、扇型をした孔雀の羽やクジラの潮吹きも不思議よね」

「鳥だって、別に空じゃなくてもよかったんじゃないかな」

「なぜだと思う？」

彼らが自らの意思でしたと思う？」

「神の意思だって言いたいのか？」

「そうよ。」

そしてそれは複数の意志だわ。たくさんの芸術家がいるようなもの。だからそれぞれが独特の考え方で様々創作を試みている。意匠をこらして、アイディアを競っている何人もの芸術家がいると想像してみなよ」

「結果から見たつじつま合わせじゃない。それこそ何の根拠もないわ。もっともらしい意見だけど、空想じゃん」

「ほかに適切な説明があるかしらね」

「別になきゃいけないの？」

だいたい、つじつまが合ってるって言ったって、人間が考える範

圈内での話じゃん。論理思考の限界を超えればいくらでも説明を超えた説明がありうるわ」

シノブが少し黙ってから、

「あんたって、むかしからそんなこと言う人だったっけ。

ずいぶん変わったじゃない」

「自分に眼覚めたからね。

あんたは乗り物かもしれないけど、わたしは自分自身よ。

あんたは神の依り代みたいになった人間だけど、わたしは生粋の神なのよ」

「あんた自身が神？ あんたが何の神だか知らないけど、じゃ、ほかの神は偽物なの？ あははは、バカじゃない。もしあんたが不動明王やインドラ神やアフラ・マズダだとしたら、ほかで不動明王やインドラ神やアフラ・マズダを名乗る者はみんな偽物だってことになるじゃん。

それじゃおかしいわ。神を名乗る者はすなわち依り代や、分御魂を宿す者じゃなくっちゃつじつまが合わないじゃん。バカね。ふふ」

「リアル莫迦か？

神なのよ。

神って数の論理に制御支配されるほど低劣じゃないわ。

神は一でも多数でもないわ。一でも多数でもあるし、唯一でもあるし、多数でもあるわ。それらのどれでもないし、すべてでもあるし、そもそもそんなことを超越してさ

神は人間の論理に支配されないわ」

「人間の論理思考は神から流出したヌース *nous* なのよ。

だから神の思考に合致するわ」

「論争はムダね。

そもそもわたしは論理絶対主義者じゃないから、ムダなのはわかり切ったことなのよ。

心と心じゃないと通じないわ。 バイブレーション 霊魂気感応 **vibration** ね」

「そうね。意見の一致はムリみたいね。しかたないわ。よくあるこ

とよ。気にしたら生きていけない。

どうあろうとわたしはわたしの神がわたしに与えた知恵のままに言うわ。

すべての存在の最終形は神に相応しい乗り物になることよ。

ただし命ある者もない者もすべてがそうなるわけじゃない。神は選別する」

「心が狭いわね。まあ、それもまた人間レベルの思考でしかないんだけど（笑）。

人間レベルって考え自体がね（笑）」

「ふん。黙って聞きなさい。

神に選ばれた優れた遺伝子が、偉大な種が様々な個体を乗り継いで行くうちに様々な突然変異を重ねて神に相応しい依り代の最終形へ到達する。しかし多くはその途中で滅びる。

神は初めから選ぶ。優劣を創る。優劣は物事を動かす車輪よ。優れた者は前へ進む車輪となり、劣った者は踏まれる大地となって轍となる。

神に至る種は最初から決まっているのよ。たとえ神が優れた才能を与えてもそれを活かす機会を神が与えずにそのまま死んでいく者がどれほどいるかしらね。数え切れないわ。特にむかしは凄かったでしょうね。名もない庶民たちに無数の知られざる埋もれた才能があつたはずよ。

選ばれた者しか名乗りを上げられない。選ばれた者の子孫しか生き残れない。人間は高度の進化の高みに達したわ。でも、まだよ。まだ進化しているわ。いつか成就するであろう究極進化の日まで。

そうよ。

その進化の最終段階に最後の突然変異を起こし、自分を創った神に相応しい乗り物になる。

数億年のかけて築き上げた芸術がその瞬間に完成し、神に合致する。終局の完成だわ。

そういうことよ」

「確認しようのない話ね。何でそんな突拍子もない考え方信じているわけ」

「神に合致する瞬間に叡智が降りて来てそう悟らせたのよ」

確かにそういう瞬間っていうのはあるのかもしれない。イユノもそう思った。

しかしシノブの考えには共感できなかった。だいたい、神が複数いるとは限らない。そもそもぜったい唯一とか多神教的とか一とか二とかって人間レベルの考概かんがえだからだ。

「まあ、いいわ。」

シノブ、じゃあ、あんたの神って何？」

彼女が黙ってイユノを見つめた。

「羅刹ラクシャシーよ。どう、驚いた？」

はあ？ 羅刹のことじゃん。神さまだったつけ？ 鬼みたいなもんじゃないのか……

「ふーん。」

よくわかんないから驚きようもないわ。

で、あんたに何ができるわけ？」

シノブの双眸が冷たく光った。

「そう？ じゃ、見せて上げるわ」

「へっ？」

うわあああつ！」

転がりそうになる。いや、イユノは吹っ飛びそうになった。電車がいきなりと停まったのだ。車輪のきしむ凄惨な音や、車両の接合部が烈しくぶつかる大きな音、あちこちで物音と悲鳴が！

「え？ な、なに、何？ 何なのっ！」

「ふふ」

「えっ……ああつ、嘘お！」

電車が！ 電車が逆方向に走り出した！

「どう、すごいでしょ」

「あんた、バカじゃない？ あとから来る電車と衝突するわ」

「だいじょうぶ、どかしちゃえばいいんでしょ？」

「どかす？」

「頭わるくない？ 線路上からどかせばいいって言ってんじゃん。

脱線させてやりやーいいんでしょ？」

「何言ってるの？ 冗談じゃないわ」

イユノは本気にしなかった、いくら何でもそんなことするわけがない。

そのときだ。さっきよりもっと凄まじい音がした。隕石が墜落して地面が揺らぐような大音響だ。電車も大きく揺れる。

「まさか！ そんな！」

イユノは窓の外を見た。

信じられない光景が…。

隣の線路を電車がバウンドしながら転がっている。転がってコンクリートの柵を突き破り、民家へ。車両の中ではたくさんの人たちがミキサーの中のトマトみたいにかき回されて血まみれになっている。

「待って！ ひどい！ ええ！」

「どう？ これがわたしの力よ」

激しい憤りがイユノの中で噴き出し始めた。

「あんたさー、あの中に人がいるのわかってんよね」

「それが何か？」

「小さなこどもだっているかもしれないわ」

「で？」

「あんた、正気なの？ まちで言ってるの？」

「そうよ。」

どおーってことないじゃん。しよせん、滅びていく人間、不必要な人間、進化できなかった劣等な人間、どうせ虚しく消え失せていく人間たちよ。これも自然淘汰だわ」

「てめー」

イユノはシノブをにらんで眼を睜く。みひらでもいまはこいつを攻撃し

ている場合じゃない。

とにかく逆走を停めなくっちゃ。そう思った。

心のどこかが冷静で、怒りながらも慎重に念を凝らしていた。

まずこの暴走電車を停めよう。

シノブが顔を憤怒の相に変える。

「きさま、邪魔するか」

イユノは冷徹な眼で一瞥する。

「それが何か？」

ガッガガッガッククンンン……

停めった！ また悲鳴が。しかし仕方ない。ふん！ 力んで今度は正常な向きに走らせる。

「なめんなよ、イユノ！」

シノブが叢雲のように気を集め、イユノの力を退けようとする。しかしびくともしない。

「畜生っ！」

イユノはそれを無視し、電車を正しい方向に進めて加速させる。しかしまだスピードが乗り切らないので、後から来る電車に追突される可能性がある。イユノは後から来る電車を探し、その速度を微妙に落とす。しかしそのままでは今度はその電車が追突される可能性がある。さらにその後の電車をまた微妙に減速させる。むしろその後の電車も、さらにその後も段階的に速度を緩めさせなければならぬ。

その他、線路の合流や分岐に関わるポイントの切り替えタイミングをすべて少しずつ遅らせたり、早めたりし、接触しないように調整した。

ある意味、プチ・ダイヤ改正みたいなものだ。論理的な緻密さが必要だが、イユノはイメージの力を利用した。

頭で考えてもパズルみたいでややこしくて追いつかない。具体的にすべての電車を頭の中に呼び出してぶつからないように命じたのだ。すべての具体現実を脳裏に現象させ、細部に至るまで現実その

ままを具体修正した。

その念の精密な作動を波のように見ていたシノブはイユノの高度で洗練された能力に驚かされていた。憤怒の表情は嫉みを交え、憎悪へと変貌していく。そこに凄まじいエネルギーが溜まり始めていた。どす黒いまでのその謂れなき怨みの情が見るだけで恐ろしいものであった。

「やめろ、きさま、わたしを否定するか！」

シノブが力を振り絞って抵抗する。しかし圧倒的な力の差がそれをさせない。むしろイユノの白熱の憤りがシノブの暗黒の悪^{にくし}みを押し返す。

シノブの表情に驚愕と畏怖とが浮かんた。

顔が見る見る蒼白色に変わる。しかし恐怖はさらなる逆上を生む。それが生存の原理だ。

「き、きさま、きさまっ」

男のような野太い声で彼女がイユノを罵った瞬間、車両の窓ガラスが一斉に割れた。同時に二人の間の床に5mくらいの亀裂が入った。

こいつ、怯えてる……イユノにはわかった。防衛のための攻撃、本心では逃げたがっている。亀裂は離れたい気持ちの表われだ。

「シノブ、あんたの言う高邁な精神ってそんなレベルなのね。

それが進化なの？」

だがいまや彼女はそんな話題には関心がないらしい。

「おまえの神は何だ。それを言え。

尋常じゃない……おまえの神は……いったい……たぶん、わたしの感覚では、平衡家の修羅……」

「知ってどうすんの？」

そうだよ。修羅だよ。阿修羅さ。アスラ、犍^{いしゆら}磔^ら羅^ら婁^らさ」

イユノの予想は外れた。てっきりシノブがさらなる恐怖に震え出すかと思ったのだ。

しかし実際はまったく逆であった。彼女は恐ろしい呪詛の言葉を

高らかに言挙げ、飛び上がって電車の天井を突き破ると、狂ったように笑いながら宙を舞い、もの凄い速さで飛んで消え去った。

「ちよっと！ 待ちなさい」

追おうとしたが、自分がこの地域の全路線の調整に集中しなければならぬことを思い出し、留まった。シノブの気配は消えた。

ようやく駅に着きすべての調整を終えて、念を凝らし、シノブを探したが見つからない。痕跡をたどっても忽然と消えていた。彼女の家を知らないが、恐らくそこへ行ってもいないだろう。もしあれば念の触手に引っかかるはずだ。隠れてしまったのだ。

「ちっ。逃げられちゃったか。」

シノブめ、こんなむごたらしいことをしてタダで済むと思うなよ。絶対見つけて切り刻んでやるわ」

2 I E

夕方四時のニュースは特別に延長され、原因不明前代未聞未曾有の大惨事となった電車事故をほとんどのチャンネルで報じ続けた。

「あなたの乗っている電車じゃないかってとても心配していたのよ」と母親に言われたが、イユノは乗ってねーよと応え、晩の食事をさつさとすませると二階の自室に上がった。

ドアを開けると、イヴィルが足を組んでベッドに坐って待っていた。

イユノは驚きもせず、

「ニュース見た？」

「私はそのような下品なものを視聴しないのです」
わたくし

「あ、そう。じゃ、軽く説明するわ。そしてあんたの考えを聞かせてちょうだい」

説明した。

「なるほど、そうですか。恐らくは」

イユノの話を聴き終えると、イヴイルはそう言いながら思慮を凝らして腕を組み、

「彼女は初めから情報を持っていたのでしょね。」

それがどういう内容なのかはわかり兼ねますが、想像はできますね。

たとえば、平衡家に特別な存在が現われるぞ、みたいな。

まあ、彼女も神霊と結ばれた存在なのですから、そういうルートを持っていて不思議はないでしょう。

きっと娑斗獅のこともあなたを揺さぶって本性を出させるための作戦だったのでしょうね。最初に娑斗獅にあなたの連絡先を教えた謎の人物も、もしかしたら彼女だったかもしれないですね。

シノブには娑斗獅への恋愛感情は皆無だったと思います」

イユノは無関心な表情で自分の部屋の窓から深い夕闇を眺めていた。

「ふーん。いまさらそんなこと、どうでもいいわ。」

「どうやったら探せるの？」

「気配は消しているでしょうね」

「それはわたしもできるの？」

「やろうと思えば」

「そう。まあ、いいわ。次に試そう。で？ あいつは、どこ？」

「むずかしいですね」

「そうなの？」

「あなたにできないことは誰にもできない場合が多いのです」

「言われてみればそうね。じゃ、いいわ。なら、話を変える。」

茸柳が何者か知りたいのよ」

「IEで有名です」

「？」

「私の住む帝国がIEの中にあるのです」

「そう言えば、あんたが言っていた帝国って何？」

「PCを立ち上げてください」

「またー？　ねー、もうちょっとさー、芝居がかったことしてくれない？　って言うかさー、もっと神秘的な感じにできないの？　せっかく神霊的な存在になったのにさー、つまんないんだけどー」

「この世のすべてはマジックです。」

「はーい。わーったよ」

「では <http://www.realworld.com/earthofideal/> にアクセスしてください」

画面にゲートが立ち上がった。

「何だよ、これ。RPGゲーム？」

「R W (Real World) の T G (第三世代 Third Generation) 用にリアルされた I E (Ideal Earth) です」

「ぜんぜんわかんないんだけど」

「お見込みのとおりRPGです」

「だからわからないっつーの。」

意味がわかって何もわかんないんだよ」

「ご明察ですね。」

理解とはそのようなものです。

納得とは心的な現象で、習慣化によって馴染んだ結果でしかないのです。

よってアイデア・本質・理性・ロゴス・論理的解釈など実存的ではないのです」

「あー、はいはい。」

哲学の時間はもういいよ。て言うか、最初の質問忘れたわ」

「茸柳たけるが熱中しているのは、このゲームです」

「えっ！」

イユノが急に表情を変えた。

「これか……」

「ちなみにこのRPGのサイバー世界の中に神聖シルヴィエ帝国と
いうのがあります。私はその帝国の枢機卿なのです」

「あんたって魔物か何かだと思ってたら、何、単にサイバー上のキャラクターだったの？」

「そうともいえませぬ。」

よってすべてがマジックなのですよ。

さあ、これを耳に差してください」

「何これ？ イヤホン？ コードがついてないけど、無線なの？」

「はい、無線です。」

商品名は *イー・アイエー* (イア) といいます。 *Interactive interface attached to the ear* の略で、実は日本の会社が作った製品です。国によつては *EpIi* (エピーイ *Earphone type interactive interface*) の名で出回っています。

従前の *HM i* (ハミイ *Head mounted interactive interface*) がさらに小型軽量化され、イヤホンのように耳に差すタイプで、目立たないように工夫されています」

「つて言われても、よくわからん。」

で、何する機械なの？」

「脳に直接データを送り込む機械です。」

これで限界のないバーチャル・リアリティ体験ができます。最高のシミュレーション・システムです。

そもそも現実というものは神の創られたシミュレーテッド・リアリティ *Simulated reality* なのですから。そう思えば私がここにいても不思議はないのです」

「・・・も面白い。」

で、茸柳はこんなことをしてるの？」

「行ってみましょうか。百聞は一見にしかずです」

「もしかしたら詳しくは知らない？」

「そうとも言います」

「はー、わかったわ。じゃ、早速行きましょう」

「では無料ユーザー登録をお願いします。メール・アドレスを入れて、IDとパスワードを設定してください。それでいいです。」

では」

アクセスした。

「え、ええー、何これ、凄いッ！」

イユノは驚愕した。いままでいた自分の部屋は消え、光の潮に飲み込まれる。すると、

「ああ！」

巨大な城壁と城門とがあった。

「うわー、凄い。

ここ何、どこよ」

「『アイディール・ワールド Ideal World (I E)』です。そういう名称のRPGなのです。

さあ、あの鎧兜の野武士みたいな大男が門番です。IDとパスワードを示してください。そうすれば中に入れます」

示し、鬚だらけで角のついた鉄兜の巨漢が言う、

「現象よ、汝自身を啓あきらかにせよ」

「わかったわ」

イユノは空中に指先でパスワードを描いた。指の軌跡が金泥のよう
うに奥深く燦めく。

門衛は大きくうなずく。

「現象とは自らを哲あきらかに表出することである。

よし、入るがいい」

イユノはてつきり大きな城門が開くのかと思いきや、門扉の一部
を小さく切った通用口のようなドアが開いて、「さあ、ささっと中
へ」

「え？ うわあー」

真っ暗だった。しかも猛烈な吹雪だ。風はからだを吹き飛ばされ
そうなくらい強く、雪は無数の弾丸のように飛んで来て、氷の刃の
ように皮膚を裂く。「い、痛あーいっ」

イヴィルがイユノの手をつかむ。

「さあ、ここはスルーしましょう。

普通のユーザーはこの苦難を乗り越えて何とか人里や交通機関のある場所まで行くのですが、私はここの重鎮ユーザーです。ショートカットできます。

ささ、こちらへ、イユノ・イシユラル」

見ると、光り輝く馬車がそこに待っていた。車は黄金に燃えている。しかしその馬車を牽くのは馬ではなかった。龍だ。そして手綱を握るのは全身黒ずくめの馭者だ。

「凄い。美しいわ。何て神々しいの。神の乗り物にふさわしい」

「さあ、どうぞ」

イヴィルに手を引かれてイユノは踏み台を昇り、彼が開けてくれた扉から入る。車内は別世界だった。

広い。まるでリムジンだ。

燦めく繻子のクッションに柔らかい上質な革が張られたソファ、絹のカーテンが幾重にも重ねられ、暖房があるかのように暖かく、マホガニーやクルミやメープルなどの木目美しい内装。

「暖かいコーヒーがいかがですか？」

そう言ってコーヒーを銀の盆に載せて恭しく差し出すプラチナ・ブロンドの少年。レースで飾られた大きなカフスつきのサテン地のフロックコートを着ていた。

イヴィルが紹介する。

「召使のユレヒト・ユーグルです。」

あなたの自由に使ってください。これも契約のうちです」

イユノは満足げに微笑んだ。

「へー、うれしい。いいじゃん、いいじゃん」

龍の牽く車は雪の上を飛ぶように走り出した。車輪は雪に沈まず、飛んでいるかのようにであった。

「何か不思議ね」

「驚くに値しません。この車を牽くのは龍なのです。翔けるように走るといふか、飛ぶのです」

たちまちいくつもの山や谷を越えた。生存不可能な厳しい寒さの

山岳地を終え、次第に雪に埋もれた尖った岩膚の斜面を這うような低木がやがて針葉樹になり、暗い森になり、湖沼地帯となり、平原となり、麦畑や村や町になり、港や海や島嶼となった。真つ青な大海原を見ながらイユノが尋ねた。

「どこへ向かっているの」

「東大陸オリエンテです。北緯25度0分7秒、東経85度26分48秒の位置にあります。私たちはさつきまで北大陸ノルデにいたのです。ここは東西南北及び中央の五大大陸を分断する海なので、裂大陸マルメディテラーノ海洋と呼ばれています。

茸柳は東大陸の神鷲山しんじゅせんという山にいます。その山は鷲のような岩が頂上にあるため、その名で呼ばれるのです」

「そこで彼は何しているわけ？」

「解脱です。」

彼は修行者の山である神鷲山で解脱し、神となったのです」

「神になるのに修行なんて必要なの？」

ま、それはいいけど、何、解脱だって？

その割には執著ねちねち未練たらたらでストーカーじみているんですけど」

「飽くまでRPG上の話ですから」

「あ、陸が見えてきた！」

港や川や田畑や町や村を越え、山岳地帯を翔け抜ける。

ユレヒトが一つの険しい山を指差す。

「イユノ様、あれです」

山の麓に着くとスピードを落とし、山岳路をゆっくり登り始めた。「イヴィル、凄くたくさんの人が、いや、人だけじゃないけど、いるのね」

「そうです。」

あれはガルダ族の四大王とその臣下たちです。

ちなみに王の名は大威徳迦楼羅王、大身迦楼羅王、大満迦楼羅王、如意迦楼羅王とその各々の眷属百千です。

彼らはすべて茸柳の教えを聞くために集会しているのです」

「ええ、教え？ 教えて何よ」

「彼はここでは奥義真理に通暁した聖者なのです。聖なる教えを説いていてそれを聴いた者は無上の幸福になると言われています」

「まじ？ ありえねー」

龍の牽く車が山岳路をいとも簡単に上り、集団の種類が変わったことにイユノは気がつく。

「これってもしかしたらいわゆる修羅族じゃない？」

「そうです。修羅の四大王とその眷属百千です。

ちなみに王は婆稚阿修羅王、佉羅騫駄阿修羅王、毘摩質多羅阿修羅王、羅喉阿修羅王です」

さらに登ると音楽神ガンダルヴァの一族がいた。

「ちなみに樂乾闥婆王、樂音乾闥婆王、美乾闥婆王、美音乾闥婆王とその各々の眷属百千です」

「これは」

「美しい声で歌う神で緊那羅族です。法緊那羅王、妙法緊那羅王、大法緊那羅王、持法緊那羅王とその各々眷属百千です」

山頂近くには龍族がいる。

「龍の八大王です。難陀龍王、跋難陀龍王、娑伽羅龍王、和修吉龍王、徳叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王とその各々の眷属百千です。

これら錚々たるメンツが教説を欣求こんぐしているのです」

「ふーん。ネット上じゃ凄いな」

山頂の大きな石の上に白く輝く者が坐っていた。

「無限の大宇宙を三步で涉り尽くすというヴィシュヌ *Vishnu* 神です。光速の神です。すなわち太陽の光なのです。普く世界に遍在する光です。その名は広がり涉るという意味を持ちます。

ヴィシュヌはアヴァターラと呼ばれる十の化身に変身して地上に現れます。ちなみにアヴァターラがアバターの語源だということです。彼のアヴァターラの一つは仏陀です」

「ええ？ ブッダって、お釈迦様ってこと？ 釈迦牟尼如来？ 悉達多？ ええっ？」

「そうです。彼は仏なのです。この世界では。

だから私は解脱と申し上げました」

イヴィルのその言葉をさえぎるようにユレヒトが言う。

「では、そろそろ車を降りた方がよろしいかと思います。さあ、イユノ様、お手をお貸しください。ステップを降りましょう。山の斜面でしかも岩ばかりでごつごつしていますから降りてからもお氣をつってください」

「ありがとうございます。わかってるわ。さあ、行きましょう」

龍の群れが一族ごとに壮麗に身を飾った龍の王を中心として集団を作り、みんな一心に前の方を見ていた。その表情は穏やかで安らぎに満ち、また深く真剣である。つつましやかに頭を垂れ、平伏しているようにも見えたが、蛇身なのでどんな姿勢を取っているのかよくわからない。

「彼らもアバターなの？」

「そうです。人間、いや、ユーザーが――AEを使って操作しています。自由意志設定にしていない限りは」

「自由意志設定？」

「自由意志設定にすると操作しなくても自分の意志があるかのように活動し、発言するのです。これによって街を行き交う人々など背景的な人物（これを環境的人物と呼びます）が作れるのです。また、友だちを作らなくてもサッカーのチームやバンドを作ることができます。

ちなみに実は気候や太陽や月や星や海や噴火や動植物の成長・行動・寿命など一切の自然現象も、原理的にはこの自由意志設定なのです」

「へー。

でも、あなたはアバターじゃないんでしょ？」

「私は環境の人物です。自由意志設定で動いています」

「まさか！」

少なくともわたしより賢いのに」

「不思議はありません。」

人間だって自然現象だし、自由意志設定と何ら変わりません。私を見ればよくわかると思います」

「まあ、いいわ。行こうよ、ユレヒト。あ、もしかして彼もそう？」

「むろんですよ」

「いいわ、さあ、行きましょう」

イユノ、イヴィル、ユレヒトはその狭間を抜けるように山頂に向かって山路を歩いた。頂上近くになって白く光輝する者が見え始める。どうやらそれが茸柳のようであった。

彼は山頂にある大きな岩の上に半跏座で坐っている。皮膚は純白で光を放ち、黄金の光が周囲に霞のように漂っていた。黙して瞑想している。

「見た眼はまったく茸柳じゃないわね」

「アバターですから」

「痩せこけているし、顔の彫りも深くて……別人じゃん。ああ、そうだ、ガンダーラ美術にある仏陀の像に似ているわ。苦行して骨ばかりになったあれに。身なりも質素だし。」

そう言えばわたしもいまはアバターなの？」

「むろんです」

「てゆーか、いつだれが作ったの？　わたし、いま、どんな格好になっているのよ？」

「時間がなかったので、適当に見繕っておきました。普段とそれほど変わりはありませんが、やや修羅らしくしてあります」

「ユレヒト、鏡ある？」

「どうぞ、ここに持っています」

見ると面影はあるが顔だちを鋭くクールに整えて、眼の周りにいかにも修羅的な隈取がなされている。

「ふーん。意外にいいじゃん。まあ、これなら許せるわ。」

さ、茸柳のところへ行くわよ」

「いえいえ、お待ちください、イユノ・アスラ。

人の楽しみを奪ってはいけません。あなたがここでいま茸柳を茸柳と呼び、茸柳として扱えば、彼を始めここに参集したみんなの夢を壊します」

「それもそうね。

わかったわ。わたしも彼の話を聞きましょう。要は彼が何者なのかわかればいいのよ」

しかし茸柳は瞑目したままでなかなか説法を開始しなかった。

「イラつくわね。何してるのかしら？」

「イユノ・アスラ。しばしお待ちください」

龍や緊那羅等々のかすかなどよめきが空気を揺らす。茸柳の額から白い光が放たれ、一瞬、世界が真っ白になって何も見えなくなる。

「おお」「何という」「ああ！」「凄い！」

やがて光は止み、平常に戻った。「嗚呼、有り難いことだ」「全知者に礼奉りまする」「素晴らしい、稀有なことだ」「善逝よ」

イユノが嘆息する。

「何なの？ どうってことないじゃん」

「それはあなたが万能のアスラだからそう思うのです」

「そうかしら」

茸柳が静かに語り始めた。深い澄んだ声であった。

「衆生よ、あなたたちは甚深微妙の幽邃なる不死の甘露なる教えを求めてここに來られたのでありましょう。しかし」

イユノは眼を丸くしてイヴイルを振り返った。

「普段とはぜんぜん違う。こんなに作れるもんなの？」

「むろんです。

しかしこれは彼の隠された才能が大いに働いているように思われます」

「ってどういうこと？」

「彼も眞神の人間です。あなたと同じなんですよ。彼にも神の眼覚

めが起きたのです」

「彼も神なんだ」

「だれもが神です。神は万能ですから」

「アスラだけじゃなくて？」

「そうです。神に限らずに、すべては無分別なのです。でも、そうではないじゃないかと人は言うかもしれません。むろん、そのとおりです。

そもそも無分別などという分別がないのです」

「わかった、わかった。その手の話ってさー、めんどくさいんだよね。でさー、ま、あいつが神なのはよくわかったよ」

「本当ですか？」

「黙れ。」

いいから続きを聞くのよ」

イタルは穏やかな静かなまま語り続けていた。

「真理はない。」

真実はない。

事実はない。

つまり、私がいま言ったことも真理でも真実でも事実でもない。それらカテゴリーはただ、神によって与えられたまま人の脳髄に表象しているに過ぎない。

しかし私がいま言ったこのことも真理でも真実でも事実でもない。我々に与えられたままに見えるものを真実であると措定したときに我々に与えられた論理的思考方法によってそれらを解釈し、その実態を推定憶測した場合に、そのような言葉に言い換えられるというだけに過ぎない。

この非情の激流の中に足掻き藻掻き苦しみ、つかまるべき棹を求めても、寄り縋るべき洲を求めても、例えば難破して喉が渴いた者が海の水を飲むとさらなる渇きに苦しめられるがごとくに、さらに枯渇して餓え、より烈しく執著し、生存へと駆り立てられるでしょう。

よく鑑みなさい。

畢竟生存とは求めることである。実現への欲望である。枯渇である。飢餓である。炎を点けられた者が狂ったように泣き叫びながら水を求めるに似ている。

厭離せよ。

それが清く正しい智慧であると私は説く」

イユノは眉をしかめた。

「ずいぶん厭世的ね。モテない奴にありがちだわ」

「なるほど。大変参考になるご意見ですね。ご自身の経験からですか」

「黙って聞きなさいよ」

そういう間にも茸柳の言葉は続いていた。

「あなたたちにはわかるでしょう。なぜならばあなたたちは敢えて選んでこのIEにいるからです。

さあ、既に知っているはずです。あなたたちは何ゆえにこのIEに来たのか。

現実世界に真理正義がない。しかしここはそうではない。ここでは正義が通じる。

そのゆえにあなたたちはここに来たのです。違うでしょうか。いえ、違うないでしょう」

茸柳は深い眼差しで衆生を眺め、そのインターバルでやや昂りつつあった声を抑えようとしていた。

「さて、私はなぜこの世に真理がないと言うのでしょうか。

明白です。正義が通じないからです。すべてが理不尽だからです。ただ物理的な法則が支配する世界だからです。すなわち強い者が勝ち、弱い者が負けるからです。

ならば物理的な法則、科学的な原理を鑑みて行動を決めましょう」

イユノはまたイヴィルを振り返った。

「ここ、IEって、そういうところなの？」

「そうです。

このRPGを作った人は厭世的な人なのでしょう。ここでは悪事をなす者は運がなくなり、貧乏になり、侮蔑され、破滅し、不幸になります。

正義をなす者はクドク・ポイントが溜まってレベルが上がり、運が付いて回り、金持ちになり、尊敬され、繁栄し、幸福になります。

そういうゲームなのです」

「へー、ま、いいことよね。現実問題は何も解決しないけど」

「はい。仰るとおりです」

「何か賛同されてもムカつくのは何なの？ まあ、いいわ」

「さあ、話のポイントのなりますよ」

「わかってるわよ。でも聞いても何の情報も得られそうにないわね」

茸柳の身体から発せられる光が強くなる。

「求めるゆえに苦しむのです。これはあたりまえ過ぎることです。

例えば、生きたいと願えば死は心を怖れさせ、苦しめます。人から罵られたくないと願えば罵られることは苦しみです。

執著を厭離すれば苦しみを超えると言われるのはこれがゆえです。

1足す1が2であるがごとく自明です」

「自明だけど身も蓋もない話ね」

「しかし筋は通っていますよ」

「まあね」

「よって私はこのように説きます。

清浄な暮らしをして執著を厭離しなさい。さすれば苦しみの激流を渡って幸福なる向こう岸に到達するでしょう、と」

集会していたすべての者たちが歓声を上げた。茸柳を讃え、礼拝する。

「何にもわからなかったね、イヴイル。行こうか、ユレヒト」

そう言って引き返そうとした。しかし。

茸柳の説教はまだ終わっていなかった。

「すなわち」

彼の全身が過酷なまでに強く燦めいた。

「執著を厭離しなければ幸福はないのです。

だれもが幸福を希います。それなのに幸福を願う者ほど執著を厭離しない。

あまりにも愚かです。まったく逆の行為をしているのです。だから不幸になってしまいうのは自明のことです。あたかも車輪の後に轍ができるようなものです。

不幸は自らが望んで得た結果です。そうなるようにしているからそうなる。1足す1が2になるごとくに明晰判明です。

だれのせいでもない。自ら掘った墓穴です。それゆえ私は言う、執著を厭離せよ、と」

「ふーん」

イユノは腕を組んだ。

「しかし現実世界は無明の闇です。

強欲な人間が次々と現われ、見る見るうちに世の勝利者となる。権力欲や支配欲や物欲・色欲、金銭欲が世界を覆って暗黒にしている。

くだらない人間が人生を謳歌している。

くだらない人間が権力を掌中にし、権勢を振るう。くだらない人間が世間に認められ、妄言を吐く。くだらない人間が出世し、多くの人々の生活を壊す。くだらない人間がその軽薄さにもかかわらず、愛の勝利者となる……」

イユノが激しく反応した。両眼をかつと開き、爛々と燃え輝かす。

茸柳もまた語調を強め、次第に激昂するかのようにであった。

「どうして常にさような者どもが現実の世界では勝利者なのでしょう。彼らは何もわかっていない、躍らされるがままに躍らされ、それでも自分では楽しんでいるつもりなのです。

愚劣。

彼らは粛清されるべき存在、処分されるべき不要品、生きる資格のない者どもです」

その厳かな威圧は凄まじいものであった。だれもが時が止まった

ように声が出せない。死のような静寂であった。

イユノはつぶやく。

「へえー、現実と違ってずいぶん過激じゃん。

でも考えは共感できるわ。さあ、イヴイル、帰るわよ。もうわかったわ」

「何がですか、イユノ・アスラ」

「決まってんじゃん。

あんたもうわかってんでしょ？

さあ、ユレヒト、帰るわ」

「かしこまりました、イユノ・アスラ様」

「ねえ、イヴイル」

「何でしょうか」

「現実の世界に戻ったら彼はいないの？」

「彼？」

「ユレヒトのことよ」

「おお。むろん、そうでしょう」

「気に入ったのよ。現実に来て行きたいわ。できるわよね。あんなだって来てるんだからさ」

「私は……」

そうですね。あなたの大神力をもつてすれば不可能はないでしょう」

「そうかもしれないけど、やり方がわかんないわ。だいたい、あんたはなぜサイバー世界から出て来られるのよ」

「私はサイバー世界に生まれたというだけで、本物、真に神幽界の存在なのです。

そういう意味では環境的人物とは言え、他の者とは違うのです。すなわち出生は本質に関係ないという格言です」

「よくわかったわ。ユレヒトを本物にしましょう。要するに出身が現実世界かサーバー世界か、っていう違いだけなのね。

でもさ、考えてみればサイバーだって一つの現実にある現実世界

じゃない。

人の心と同じ原理よ」

「なるほど、確かに心とは現実的に言えば脳神経細胞を走るインパルスでしかなく、映る現象は実体のないコンテンツですが、哀しみや喜びは人間にとって現実です。

考えるまでもなく、世界すべては心の上に現象しているのです。意識によって存在はあると言えるわけです」

「さあ、理屈はどうだっていいわ。現実こそが真理よ。さっそく始めるわ」

イユノは瞑目した。

「ユレヒト、じつとしていなさい」

「かしこまりました」

「あなたのイメージを強くわたしのまぶたの裏に描いたわ。その画像を現実世界に刻印する。さあ、わたしの手を握って。一緒に行くわよ」

「ありがとうございます」

ユレヒトがイユノの手を握る。イヴイルが言った。

「ではログ・アウトしますよ。」

いざ、現実世界へ」

気がつくと洋館の二階にある自分の部屋にイユノはいた。耳からI/AEを外す。ユレヒトが立っていた。

「当然ね。大成功だわ。さて」

「ああ、信じられません。素晴らしい。ここがイユノ様のお部屋ですね」

「そうよ。」

あ、それからついでにあれも連れて来ちゃったわ」

「え？」

イユノはカーテンを開ける。

「ああ！」

ユレヒトが声を上げた。空中に龍の牽く馬車が浮いている。黒尽

くめの馭者もいた。

「おお、何と。」

イユノ・アスラ、やりましたね」

「気に入っちゃったのよ。」

さっそく出かけるわ」

「どちらへ」

「薙久簑よ。神中洲に行くわ」

「例の事件のことですね。私もおともをしましょう」

「もちろんよ。さあ、ユレヒトもお願いするわ」

三人は窓を開けてひらりと宙を舞うように渡り、馬車に乗った。流星のように天翔ける。その軌跡は夜の虹になって燦めいた。

3 狩猟

イユノは柔らかい革張りの座席に深々と身を沈め、繻子のクッションにもたれかかる。ユレヒトがコーヒ―を淹れ、美しい陶磁器に注いだ。

「贅沢な気分ね。」

さあ、狩りを始めるよ。そろそろ気配を消すわ」

龍車は漆黒を身にまとい、闇に溶け込んだ。薙久簑町の上空に着き、神中洲の雑居ビルの屋上に着地した。

イユノは左腕の青龍を見た。いくらか鮮やかになっている。碧さが輝くように見えた。蒼く青く碧いその鱗の一つ一つが美しい装飾のように。

指を動かすとその軌跡がパウダーのような光輝の靄になって残像する。楽しい。力は充溢している。闘いたくてしょうがないくらいだった。

「イヴイル、いま何時？」

「22時です」

「降りましょう。ねえ、馭者の名前は何て言うの？」

「ヌエ・クロノです」

降りてすぐに振り返り、

「じゃあ、ヌエ。車をしっかり守っていてね。武器はあるの？」

黒い男は氷のように光る剣を抜いた。

「いいわ。」

じゃ、よろしく」

ヌエ・クロノは身を正し、深い辞儀をした。

三人は夜の繁華街の裏路地を歩く。イユノはともかく異様な衣裳の二人に通りがかる人は呆れ顔で瞠目した。

「どうやらこつちのようね」

イユノの双眸が青く光る。そのときだ。叫び声が。

「悲鳴です」

ユレヒトが緊張した声で言う。

「わかってるわ。そこよ」

二人の高校生男子がしゃがんでいた。いや、腰が抜けてしまったのだ。前髪を垂らし、毛を逆立てたイケメンだが、その顔はすっかり引き攣り、顎が震え、歪んでいる。

その二人の前には凄まじい怒気と怨憎の形相を浮かべた牛頭の化け物が立っていた。全身から赤黒い炎が渦巻き上がっている。

「貴様らのようなクズが、軽薄な心で欲望のまま女をたぶらかすケダモノがやりたい放題、快樂を貪って、人を嘲笑う。さような悪事を天が赦すと思うか」

「ひ、ひえー」「わ、来るなバケモノ！」

牛頭魔王がカツと眼を睜く。みひら

「天誅じゃ」

「ざけんな。ちよつと待ちなさい」

振り返える怪物を、イユノは微笑を浮かべながら面白がって眺める。

「あれー。」

何、その不細工な格好。

それもあんたのお得意の化身の一つなの？ センス悪過ぎ。だからモテないんだよ、茸柳」

「何っ、お、おまえは」

「あら、わからない？ 冷たいじゃん。あんたの同級生よ」

「平衛イユノか。」

面影があるが。まさかおまえも」

「そうよ。ヴィシユヌ神くん。」

あんたの立派な説教を聞かせてもらったけど、残念ながら口先だけだったみたいね。

解脱しなきゃいけないのはあんたじゃん。執著を厭離しなさい」

「何だと。ぬうわおとおお。利いた風なことを言うな」

「そうよ、あんた、アザミに告白もできなくて……歩夢がいるから諦めてるつもりなんでしょうけど、結局、歩夢と同じようなちやらいイケメンに八つ当たりしてさ、それで人の命を奪うなんて。」

ま、別の人格があんたの寝ている間にやったことなんだろうけどさ、だからって人を殺した罪を簡単にぬぐえると思うの？ あんたはね、とんでもないことをしたことに変わりはないのよ。わかる？

サイテーだよ。

あんたのその姿より心が醜い。

男なら正々堂々アザミを奪ってみなよ」

「わかったようなことを言うな！

俺をナメるな！」

凄まじい炎の塊が牛頭魔王の角から迸り、それが龍のように大地に這いうねりながらイユノを襲った。

「は。わたしに敵うと思うの？ 莫迦じゃね？」

イユノは軽く平手ではじいてしまった。

「き、貴様っ！」

「さあ、今度はこっちから行くわよ」

陀羅尼を唱えてその言葉が光の巻物の上に輝く文字となって浮かび、蛇のごとくに牛頭魔王を緊縛する。

「う、うぎやあつ」

「どう？ 聖なる真理の言葉よ。本来ならあんたが使うべき呪よ。反省しなさい」

牛頭魔王は苦しげに身もがいた。

「苦しいの？ つまりあんたがあんたの言葉といかに乖離してるかってことよ。」

あんたの自己矛盾の証よ」

その姿は小さくなり、茸柳の姿のイリュージョンに戻った。しかしすぐに熱く強い光に変じて放射線状に広がり、拡がりながらさまざまな態様を倣し、無限の精緻さを為して、それは終には森羅万象を遍く象り、微妙で複雑で極まりなく、捉え難い、無際限なる形状を倣す、無のごときありとあらゆる存在となった。圧倒的な迫真性、現実存在の生々しさ鮮烈さの躍動奔放が炸裂、明晰強烈な物的非情性、聳えて動かし難い無表情な物質性、無味乾燥で無情な存在性によってイユノたち三人の魂の生命を無みし尽くしそうになる。

「世界宇宙を三步で歩み尽くす我が力の横溢を見よ。世界を凌駕する我が生命の氾濫を見よ。」

我こそが宇宙。我こそが光、我こそが闇。我こそが熱、我こそが死。

我は万象なり。網羅せぬものなし。

万象が真理なり。完全無欠なるがゆえに。

我は一切なり。万全万能全知全能涯しなし。際限なし。

一切が真実なり。現実なるがゆえに。最も強く烈しく大きく広く威ありて神々しく高貴で自在で奔放で異様に鮮やかな晰らかさなるもの。

我を超えてありとしあらゆる何も彼もなる我、空のごとし。

際なく、無限なり。神々の皇帝なり」

だがイユノの双眸がさらに妖しく烈しく炎のごとく燦めいた。

「くだらない。」

百万の並行宇宙だって、わたしの気まぐれな戯れにとっては狭過

ぎるのよ。

無際限って？　つまらない理屈ね。無限も一つの有限に過ぎないわ。ゆらゆらたわむれあそべ」

そう言って片手で光をつかみ、てのひら掌に収めてしまった。

「さあ、茸柳、あんたは今日からわたしの臣下よ。殺人罪も神だから赦してやるわ。悔い改めなさい」

「畜生、何でだ！

何で俺はいつもこんな目に遭うんだ。何で俺だけが、畜生！　奴らは何の功德があつてついてるんだ！　畜生！　畜生！」

「そうじゃないでしょ。

あんたは歩夢に嫉妬してるんでしょ」

「ああ、そうさ。それが悪いか！

だが違うぜ！

歩夢はアザミに風俗店で働かせているんだ。デリバリーヘルスつて仕事をさせてるんだ。自分の彼女にだぞ！

金が欲しけりやあ、自分でバイトですりやあいんだ！　それなのに、あいつはアザミを働かせ、しかも性風俗店だ！

最低じゃないか、あいつはアザミを愛してなんかいないんだ！　そんな仕打ちをする奴に何でアザミはついて行くんだ。理不尽じゃないか、あんまりじゃないか。なぜ、何で好きなんだ、どうして嫌いにならないんだ、何でそんなにも好きになっているんだ、在り得ない。最低じゃないか、違うか、俺のどこが間違ってるんだ。

どこだ、どこ？　どこが違うってんだっ！」

「で？

それが現実なんだもん。アザミは歩夢が好きなのさ。あんたの理屈が間違ってるよ。人間ってのはねー、微妙なものなのさ。

って言うか、あんたが『理不尽じゃないか、あんまりじゃないか』って言うのは『俺がこんなに純愛で愛しているのになぜ歩夢みたいなやつが好きなんだ』ってことなんでしょ。

違う？」

「黙れ、外道めっ！」

「好きなんでしょ？」

「うう、俺はな」

「どっちなんだよ、好きなんでしょ」

「・・・ううううっ・・・」

「ふーん、やっぱり好きなんじゃない。

って言うかさ、あんた、歩夢みたいな奴を愛してって言うけどさ、アザミに告白したことあるの？

彼女はああいふ男が好きなのよ。身を滅ぼすと思うけどね。あんたはそれを心配してじゃなくって、ただそれをネタに嫉妬心を正当化してあわよくば実らぬ恋の恨みを晴らそうとしてるんでしょ？
その前にやることがあるんじゃないの？

順序が違うよ。

心に従いなさい。

好きなんだろう！

好きって言えよ。それもしないでうじうじし嫉んだり、自分は正義だって言ってみたり、他のイケメンに八つ当たりしたりてさ。もっと素直になんな」

茸柳はすっかりしよげていた。

「何となくわかってくれたみたいだねえ。

ねえ、あんたが立派な説教できるのは神だからなのよ。あんたの心があんたに命じたままに従いなさい。そうすれば、立派な仕事ができるはずよ。

あんたの言うことは間違っていないけど、あんたにはそれを成す真実の智慧がないわ。

わたしが教えて上げるからついて来なさい。

それほどの力をムダにしちゃいけないよ。うだうだ言うな。自信を持ちなさい」

手の中から苦しげな泣き声が。

「うう、ううう、うえええ」

「泣いてんじゃねーよ。」

そう、あんたらもね。そのイケメン、カッコ悪過ぎだよ。男でしよ。

さあ、行こうか、ユレヒト、あなたはイケメンだけど、精神もイケメンね。わたしは最高に気に入っているわ。

イヴイル、ヌエを呼び寄せてよ。凱旋するわよ。黄金の光燦に輝きながら縦横無尽に天翔けて、このちんけな街の家畜どもを吃驚させてやりましょう。

ああ、いい気分。一楽隊でも連れて来て凱歌を歌わせたいぐらいだわ。最高よ。

見て、空の星も祝福しているみたいだよ。ねえ、茸柳、あんたもわたしみたいに幸せになりなさい。それが真理よ。

さ、帰るわ。

ああ、楽しかった。素晴らしい狩りだったわ。今日の獲物は大きなヴィシヌヌ神。久遠の譽ほまれだわ。永遠の炎が紫摩黄金に熾えて煙らかなる金字塔よ。

大勝利、大収穫よ。あははは」



唯 I